

在特会の論理(16)

——歴史問題が気にかかっていた P 氏の場合——

樋口直人（徳島大学総合科学部）

1. 経緯

本稿は、2011年12月11日にP氏（20代女性）に対して実施した聞き取りを、意味が伝わりやすいように適宜並べ替えて再構成したものである¹⁾。在特会に女性メンバーが少ないこともあり、筆者がこれまで聞き取りした女性活動家は4名で、そのうち20代はP氏のみとなる。一般に、若年層が主たる担い手となるのが2000年代後半に生まれた排外主義運動の特性とされるが、P氏はその中でも若い方に属する。

2. 政治に対する関心

20歳から選挙権もらいますよね。そこからやっぱり、自然と（政治に）眼を向けるようになりますね。それ以前は、パッパパラパーですよ。全然、ほとんど興味がありません。新聞なんかも三面記事くらいしか読まないし、テレビ欄とか、そうなんです。でも選挙権、20歳超えたらもらえるというんで、私も自分の一票は国の将来に関わってくるよと思うと、責任感あります。で。（選挙には）行ってます。選挙権をとった最初のほうは、家族が言うようなところに入るとか、ちょっと甘い感じでしたけど。投票先は、とりあえずまあ自民党ですね。この間（の選挙）も自民党です。

うちの親の世代はアホなんで、もう税金さえ払ってれば平和だろ、みたいな感じですから。話にならないですよ、何しやべっても。（親の影響は）まったくありませんね、うちは。（政治の話は）親とはできません。

1) それまでのまとめとして、樋口（2012a, b, c, d, e）を参照。そのうち女性は1人しか含まれていないが、全員分を本稿のような形式で公開する予定である。

3. 歴史修正主義からの出発

（周囲に外国人は）いないです、うちは。接点ないですね。周りに在日の子ってのも、ほとんどいないんで。ちょっと出会わないですね。（在日とは）接点がないんですよ。

（初発の関心を）わかりやすくいうと、慰安婦の問題とかありますよね。私らも学校で、日本軍は朝鮮人の女の人を無理やり慰安婦にして、むちゃくちゃにしたという教育をずっと受けてきたんで、実際これは本当かな？という単純な疑問から興味が湧いてきていたんですよ。で、今でも慰安婦の問題、左側の人らは補償しろとぎゃーぎゃー言ってますんで、事実と異なるのであれば、こっちも声出して反論しなきゃと思いますし。

幼稚園ぐらいから結構興味があったんですよ、戦争問題とか。8月になると、戦争特集とかテレビでやりますよね。あれ見てて、何でこんなに日本が悪い悪いといわれなくていけないのかという疑問があったので。誰に教えられたわけではないですけど、やっぱり右に寄っていきますよね。

大きくなると、学校で教えられたこと以外に自分でも調べたりとかして、「ああ、事実と違うわ」って。（自分で調べるようになったのは）高校出からですかね。いろんな本を読むようになりましたし。学校の勉強から解放されたのがあったんで、好きなことを——好きな本を読めるようになって。

朝鮮人は慰安婦の件に関して賠償しろだの言ってくるような民族なんだな、と。そこから広がっていくわけですよ、調べる項目が。（本国と在日コリアンに）距離はないですね。教科書の中にも強制連行という文字がありましたから。慰安婦の問題だけでなく、在日朝鮮人の言っている主張というのは、学校で習ってきたのとはいろいろと違うんですよ。強制連行がどうか、学校では強制連行って教えたりされたけど、大人になって自分で調べると、「それも違かったんだな」っていう。

調べていけば調べていくほど、慰安婦でも強制連行でも、こんなにはっきりしない事実がちゃんと解明されていないことを、生徒に教えたんだろうって。そこでぶち当たるのが日教組なんですよ。実際、小学校までの教科書には、慰安婦と強制連行と南京大虐殺が明記されてたんですけど、中学校からは教科書変わりまして、「南京事件」に変わったり。慰安婦と強制連行はもう

表記されなくなっただんです。実際、事実じゃないから、はっきりしないから教科書には載せないことになったので。単純に腹立ちますよね、学校でそう教えられてたとか。

(歴史記述については) すごいよく覚えてるんですよ。この問題だけですね。戦争の話について。高校でも変わってました。記述が無くなってました。どうにもね、日本は悪かったんだよってという教育ばかりを受けると、逆にちょっと反発したくなるんですよ。「本当なの？」みたいな。それで単純に、我々の先祖はすごく凶悪犯だった、みたいなレッテル貼られてるのも腹が立つし、納得もいきませんし。

4. Mixi から在特会へ

(Mixi に入った時は) 友達とのコミュニティって感じで、コミュニケーションをとるためのツールですね。Mixi 自体は 4、5 年やってるんですけど、保守系に入りだしたのは 3、4 年前になるんですかね。ネットで(保守関係の情報を得るの)は、Mixi ですね。保守系のコミュニティとかばかり入ってたんで。やっぱり、おかしいことをおかしいって主張しなかったから——日本人は——ここまで「朝鮮人の団体が大きくなりすぎてる」っては、ずっと思ってたんで。どっかで声上げていかないと、もっともっと大きくなられても困るし、というのがあったので。

民主党が政権をとりそうになったときは、特に保守系のコミュニティが盛り上がりますんで。外国人参政権に反対するコミュニティとか、いっぱいできたんですよ。そこで「ビラ配りをしますから協力できる人は来て下さい」というのが近くであったんですよ。それは在特会ではなくて、保守系の人個人でやっているビラ配りだったんですけど、とりあえずそれには参加しました。飛び込みで参加しました。(テーマは) 参政権でした。それが一番最初ですね。それがちょうど 2 年前くらいですかね。(参加したのは) あまりに無関心な人の方が多かったんで、その時は。何か 1 つでも行動しないことには、何ひとつ変わらないだろうな。本当だったら、日曜日にデモ行ったりするの面倒くさいですものね。でも「やらないといかんだろうな」という……。

うちの団体は、明確に目的を掲げて団体名にしているわけです。「在日特権を

許さない市民の会」である、そこはまあ、もちろん自分が同調するから入ってますし。でも日本でいえば、在日の人らの勢力があまりにでかすぎるかなと思うようになったので、在特会に入ったというのはあるんですよ。

(きっかけは) 外国人の特権に反対する団体があるんじゃないかと思ってネット検索したら、正しくそれを団体名にしているような、この団体が一番最初にヒットしたので。もうこれは入ろうと思って。だから私、動画なんて見てないし、今でも動画なんて見ないですよ。『盛り上がってるから』とかね、そんな…じゃなく、『楽しそうだから』とかそんなのもまったくなく。すぐに入って——簡単に入れますからね。そうしたら、いついつデモやりますっていう情報がメールで来るようになるので、それで参加しましたね。(参加時には) ちょっと緊張しましたがけど——朝鮮総連前の街宣でしたんでね、あれね。

5. 行為の持続

(初めて参加してみて) 画期的でした。画期的だなと思いました。今まで朝鮮総連に向かってやいやい言っていくような一般人、いなかったです。それをもう、『出て行け』だのねえ…真っ向勝負挑んでるというのが画期的だなと。(右翼とは) 違いますね。右翼というのは、うちは市民団体ですので、一般の人がどんどん増えていく形になりますけど、右翼は別に人増やそうとかそんなではないですよ。そういうところには入っていきにくいですよ。

慣れないことを初めてやりましたんで、緊張しましたが、やり終わった後にはやっぱりよかったなと思いました。(かつては) それ言ってしまうと、差別とか何とか言われましたし。やっと日本も、ここまで言えるようになったんだっていう。画期的ですね、本当に。

(運動に参加して) いいことは、情報が早く回ってくることだと思うんですよ。いろんな人の話を聞いたりするんで。あとやっぱり、ギャラリーとかでも「応援してます」って言うってくれる人がちらほら出てきたとか。そこはやり甲斐あるかなと思いますね。

国の将来をものすごく心配してますので。国が心配なんですよ。その一言に尽きますよね。しょうがないですよ。戦後ね、日本というのは左に偏

りすぎたと思うんですよ。それを真ん中に戻していききたいなと思います。右にまでいかんでいいんですけど、ちょうどいいくらいまでは戻していききたいな。(国は)ずっと好きですけど、小学校くらいからですかね。戦争みても日本軍はカッコいいなと思いますし。(天皇のことも)学校では教えてもらえないので、正しく「天皇陛下」って知識を得たのは18(才)とかですかね。自分で本読むようになってからです——日本神話とか。

なんで在日を糾弾するかっていうのも、大きくいうと日本のためによくないと思うから糾弾するんですよ。在日特権というものを、廃止になるまで、なくなるまでやらなければ。折れるわけにもいかんし。「在日特権」に急に関心を持つようになったのは昔は子どもだったというのもありますけど。最近になってぼろぼろと、「やっぱりあった、特権が」というのが出てくるようになってますから。それまでは出てきもしなかったようなものです。

(参加は)自分の生活のほうが第一ですので、空き時間があれば活動するという感じで。自分の時間も大事ですし。(周囲の人には)隠してるわけではないですけど、あえて言いませんけどね。がちがちの話をするのは、友達にはかわいそうかと思うけど、ちょっと言われてしゃべったりすると、「ああ、日本ってそういういい国なんだ」って。友達でも一部ではちょっと分かっている子がいるから。そういう子たちは、何で活動には直結していかないかという、やっぱり保身のためもあると思うんです。動画撮られたりとか、そういうのもあると思うので。(周囲の人は)メール会員にはなっている子もちらほらいますが、活動には出てこない。「会社の人にばれたら困る」とかありますか。私の場合は結婚してるので、自分が仕事をしてるわけではないですし、だから会社にはばれるとかそういうことはないですね。(夫は)危ないんじゃない、という心配はしますが。「やりたかったらやったら」という感じですね。(誘ったりすることは)それはしないです。

(人前に出るのは)やっぱりね、どんな嫌がらせされるかもわからないわけですから、できれば本当にデモとか行きたくないんですけど。行かないとしょうがないかな、という感じですよ。どこでどういう写真とか動画をさらされるかもわからないです。なので、ストレス発散のためにやっていると、寂しい人たちがやってる、在特会を叩きたい人はそう言うんですけど、

ストレス発散のためにここまで大きいリスクは普通犯さないとと思うんですよ、私。顔さらしてるわけですから。(それに対して)抵抗はあるんですけど、だからといって黙っているわけにはいかないですよ。

仮にもし、嫌がらせとかを受けないといけなくなったとしても、国の将来を思えば行かないわけにはいかないということですね。結局、原動力はそこに直結してくるんですよ。選挙権を得てからちよつとずつ考えるようになってきましたね。一歩ずつとは言わずとも、半歩ずつでもいいから、ちよつとでも変わっていけるように。

6. 外国人参政権について

民主党が政権を取りそうになった時くらい、ですかね。3年くらい前ですね。(知ったのはネット)もありますし。すごく関心のある友達とかは、「こういう法案って危ないよね」って言うてる子もいた。(その人は)全然普通の一般人ですね。「外国人参政権っていう話はおかしいと思わない？」って。おかしいと思いましたし、話聞いてて。(民主党政権に)なる前ですね。

(自分にとっては)最重要事項ですよ。法案が通ったからといって、1、2年でどうこうということはないと思うんですけど。まあ、10年20年30年先を考えると、日本が日本人のものじゃなくなりますよね、あれって。徐々に徐々に——このご時勢に大東亜戦争みたいな戦争というのは、あんまりありえないかと思うんですよ。軍隊使ってという・・・。

ただ、こういう形での侵略っていうのはありえるかなと思うんです。地方では朝鮮総連が・・(そういう)集団みたいなものの意見ばかり聞くような議員が出てくるだろうし、それは国政にも関わってくるし。どうしても参政権というんだったら、帰化してもらおうほうがいいかなと思います。朝鮮人の場合は、帰化してもらったところで信用できない部分はやっぱりあるかな、と思いますけど。ただ、でもまあ、帰化すれば日本人と同じ権利は当然彼らにも与えられるわけですから。

無責任さを感じるんですよ。何かあったら別に自分の国に帰ったらいいよって感じですよ。日本人として生まれて、今後日本がどれだけぐちゃぐちゃな状況になろうが、日本と共に生きていくしかないですから。責任感と

というのがあんまりないんじゃないのかな、外国の人に参政権を与えても。三世四世五世にまでなって、ずっとこの先も日本で生きていくだろうけども、帰化しないというのはよくわからないですね。親の国籍は変えたいというのは、わからんでもないけど、ずっと日本で生きて日本で死んでいくのであれば、やっぱり日本国籍をとったほうが絶対いいだろうし。

7. 結語に代えて

P氏は、幼少時からの歴史修正主義的傾向を根っこに持ち、在特会へと引き寄せられた。テレビの戦争番組を好み、教科書で取り上げる「論争的な歴史的事件」についてまで記憶している。これは別に彼女が学校文化に親和的だったからではなく（彼女は、学歴的にも職歴的にもエリートとはかなり遠いところにいる）、歴史記述に対して幼少の頃から常ならぬ関心を示していたことによる。それが当初はMixiを介して、その後には在特会での直接行動を通して表に出るようになっており、「思想的なキャリア」は他のメンバーと比べても長いといえる。

こうした志向は、祖父母や両親から継承する場合もあるが、P氏の場合は異なっている。彼女自身の意識では、教育に対する個人的な反発が存在し、それが変わることなく現在に至っている。さらに、「在日コリアンが強制連行された者の子孫というのは嘘だ」という、在日コリアンの自己規定をそもそも歪曲した言説の受容を介して、歴史修正主義が排外主義へと転化されていく。その一方で、彼女は愛国心の強さや天皇に対する敬慕の念も持っており、それが排外主義を強化する材料ともなっている。歴史認識の問題は、排外主義運動に至るもっとも有力な経路であり（樋口 2012f）、過去清算の失敗が戦後60年を経て運動を生み出したといってもよい。こうした排外主義を掲げる政治勢力が、今後日本で出現するかどうかはわからない。が、民主主義の生み出す悪夢ともされる極右政党の出現を予防するに際して、日本の場合は近隣諸国との根本的な関係改善が不可欠であることを、彼女の事例は示唆している。それは、彼女をはじめとする潜在的な在特会支持者が持つ「愛国心」を最悪の方向にむけないためにも必要なことと思われる。

文献

- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)～(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号.
———, 2012b, 「在特会の論理(8)～(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
———, 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)～(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
———, 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
———, 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.
———, 2012f, 「排外主義運動のミクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。